

3. まとめ

意識調査の結果から、以下のようなことを指摘できる。

- 1) 大学生の中で、就職先を選ぶ基準として、現実的に「働き続けられる」ことを重視する者もいるが、多くは仕事でやりたいことをする、仕事を自己実現のためのものとして考えている。
- 2) 大学生の中では、結婚や子育てといった就職後私生活に起こりえるライフイベントのイメージは模糊としており、就職先を選ぶ時点ではそのような観点が反映されていないようである。
- 3) 上記の点は、大学生のワークライフバランス認知度の低さにも表れている。
- 4) 固定的性別役割認識は強く、特に男子の傾向が強い。どのようにたずねるかも関連するため、一概には言えないという指摘もあるかもしれないが、結婚相手を選ぶときに考慮する点の回答傾向から、家庭の経済的な柱は男性が担うというのは男子だけではなく女子大学生にも共通した一般的な考え方であると言えるであろう。
- 5) 全般的に、専攻により働くことに対する考え方やライフプランの成熟度の違いが見られた。就職後の職業が決まっている専攻の場合、イメージは具体的であるのは、ある程度一貫した先輩の後ろ姿をみることができるといえると思われる。男性が多い専門分野では、男性主導のイメージが強い様子がうかがえた。
- 6) 大学生も日本の社会の中で、男女間の優遇のされ方の違いを的確に捉えている。政治は極めて男性主導であり、社会通念も男性主導であると認識している。特に女子に、このような認識が強い。
- 7) 結婚や子育ては漠然としたものであるとしても、全般的に前向きなものである。5)の分野や業界のロールモデルの存在とライフプラン像の構築とも関連してくる。

以上の内容から、下記のように提言をしたい。

近年「七五三」問題というような若年層の離職率の高さが問題になっている。転職そのものが悪いと言うことではなく、キャリアアップのための転職ならむしろ好ましい。しかし、「やりたいことができないから」という理由で仕事を辞め、その後安定的な職に就けず非正規雇用の状態が続いてしまうことが大きな問題と言えよう。このような背景として、我が国のバブル経済崩壊後、企業が担ってきた人を育てる役割を放棄してきたということは大きい。また、グローバルスタンダードの導入が道半ばであり、転職という考え方は、本来ジェネラリスト志向の日本社会の中で十分に受けとめきれていない、というようなこともあるかもしれない。他にも様々な構造的な要因があり、問題を十分に整理し理解することは難しいだろう。

就職後間もなくの離職後に、若者が意欲や思いがあるのに「宙ぶらりんになっている状態」は、若い力を社会の中で育てていくことが十分にできないために、長期的に大きな損失になるという点だけではなく、生活が安定的ではないと結婚できず(あるいはほしくないことを選ぶ)、結果として子どもをもたなくなるという点でも、社会にとっての損失となると言えよう。

我が国がジェネラリストな社会であるという前提で、続けることが「やりたいこと」や「できること」の発見につながることを若者にしっかりと伝えることも重要だと思われる。そのためには、働くことについて、自分に落とし込めるほどに具体的なイメージをもつような機会が有用である。インターンシップはその一助になると思われる。インターンシップは、近年ますます一般化しているが、より意義のあるものとして機能するように機会を設定する必要があるだろう。

就職活動は、自分のこれからの人生を考えるととても良い「区切り」である。ワークライフバランスと言うような視点を備えていれば、仕事とプライベートをどのようにつなげていけるのか、あるいは切り離してバランスをとっていくのか、ということを考えることができ、継続的に働くことの意義や動機へとつなげていくことができると思われる。

昨今、「イノベーション」という言葉があらゆるところで多用されているが、このイノベーションは全く新しいことを生み出すことではなく、事柄の組み合わせで生まれる新しさである。これまでと違った切り口で見ると、新しいということである。成熟しているとは言え、我が国の社会では未だ男性主導の部分が多いことは否めない。豊かさが行き届いているが経済的に余裕のない現代社会には多くの問題課題が存在する。これまでなかったとするならば、女性の視点から見つめてみると新しい解決策が生まれる可能性がある。性別に限定するものではなく、多様性がこれからの社会の形成にはますます重要なものになってくると言えよう。

男女共同参画にパラダイムシフトが求められている。次のフェーズに高め、性別だけではなく多様性を実現できる社会こそ、このグローバル化していく社会の中をしなやかに航行できるのだ、という考え方を浸透させて行く必要がある。これまで女性が少なく男性が台頭していた分野や業界こそ、女性の視点を取り入れることで新しいものが見えてきて、イノベーションへとつなげていくことができる、それがベネフィット（利益）を生むということである。「言うが易し」と思われがちなのような「理想像」を社会に広めていくには、実現している事例を、ネガティブなレッテルを貼ることなく、取り上げ賞賛していくことが何より有用であると思われる。